

シリーズ

新・農業人

紺野 敏宏 さん

株式会社紅梅夢ファーム 専務取締役

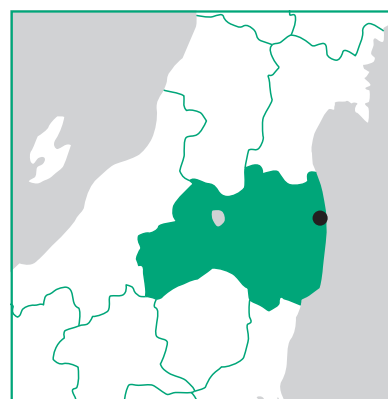
「右腕」として若手を育成
先端技術も活用し
ふるさとの風景を次代へ



上) トラクターなどの走行データはWi-Fiで自動送信される
中) 大豆の生育状況を細かくチェックする
下) 順調に育つ稲にバッタがとまっていた



株式会社 紅梅夢ファーム
所在地 ● 福島県南相馬市小高区
設立年 ● 2017年
経営規模 ● 稲作67ha、大豆23ha、菜種20haほか計114ha
従業員 ● 8人
URL ● <https://kyf.co.jp/>



ふるさとの風景を守る

「このあたりの田んぼにも、最近
はバッタやカエルが戻ってきたん
です」

目を細めてそう話すのは、福島
県南相馬市小高区の農業法人「株
式会社紅梅夢ファーム」の専務取
締役、紺野敏宏さん（37歳）だ。米や
大豆、菜種など計114haを生産
している同社は、義父の佐藤良一さ
ん（68歳）によって2017年に設
立された。紺野さんはいま、代表取
締役である佐藤さんの右腕として、
日々奔走している。

生産された米の約半分はアイリ
スオーヤマのパックライス用に出
荷するほか、飼料米としての作付
けも拡大中だ。また、自社商品とし
て「新世代」というオリジナル米を
販売したり、菜種を焙煎したオイ
ル「浦里の雫」などの6次産業化も
展開している。現在、8人の従業員
が正社員として働いており、その
平均年齢はなんと27歳だという。

紺野さんは、自分のことを「決し
て積極的に前に出ていくタイプで
はない」と評する。じつさい、紺野さ
んと従業員のやりとりを見ている
と紺野さんは頭ごなしの指示など
はしない。一歩引いたところから見

守りつつ、間違いなどがあればハッ
キリ指摘してくれる、いわば「みん
なの兄貴」だ。

紺野さんは、南相馬市で兼業農
家を営む家に生まれた。紺野さん
も、幼いころから農作業を手伝っ
ていたという。

地元の高校を卒業した後は、6
年ほど自動車整備業に従事してい
たが、転機は突然訪れた。11年3月
11日、東日本大震災が発生。自宅は
福島第一原子力発電所から20^{キロ}圏
内だった。「警戒区域」に指定され、
避難を余儀なくされた。

16年夏、5年の歳月を経て居住
制限が解除。久しぶりに南相馬に
戻ってきた紺野さんを待っていた
のは、がらりと変わってしまったふ
るさとの風景だった。田んぼや畑
は荒れ果て、草も伸び放題。人が減
って、地域全体が静まり返っている
ようだった。紺野さんは、ただただ
ショックだったという。

だが、ふるさとの空と風だけは
変わっていないかった。すうつと息を
吸うと、懐かしいにおいが胸いっぱ
いに満ちた。

自分が好きだった農の風景を
取り戻すことができるのか、とい
う紺野さんの不安はいつしか、「自
分の手で農業を復興していくしか

ない」という使命感に変わっていった。最初は何から始めたらいいのか見当もつかなかったが、地域の惨状を目の当たりにしたことで、目の前のことから一つずつ取り組んでいこう、今こそピンチをチャンスにしよう、と思うようになったという。

その頃、田んぼでの営農も徐々にだが再開されていた。これは、佐藤さんが実に5年をかけて形にしたものだった。福島県産品への風評被害を少しでも払拭しようと、水稻の試験栽培から始め、農林水産省や復興庁などさまざまな関係機関を説得し、問題がないことを実証してくれていた。

折しも、紺野さんは佐藤さんから、新たに農業法人を立ち上げようとしていると打ち明けられた。居住制限が解除されても、故郷に戻ってくる人は少なく、かつて約3200もの地権者がいた田畑は、30ほどの農業従事者が耕作しなければならぬ状況になっていた。有り余る休耕地を預かって耕作・再生し、地域の農業を守っていくための、佐藤さんの決断だった。

ふるさとの風と、農の風景を守るため、紺野さんは専務取締役として同社にかかわることを決めた。

若手従業員に活躍の場を

多くの農業法人にとって、若手従業員を雇用し、勤め続けてもらうのは、目下の大きな課題だ。だが驚くべきことに、紅梅夢ファームの離職者は、今まで一人もいないという。そこで、紺野さんにその秘訣を尋ねると、「若い従業員を積極的に採用することと、働きやすい環境を作ってあげること」という答えが返ってきた。若い人が多く集まる経営体には、若い人が応募しやすい。応募者に面接をするのは佐藤さんで、「元氣とやる気がある子かどうかを見きわめている」という。また、佐藤さんは農業大学校の出張講義に登壇するなど、広く担い手の育成にも取り組んでいる。同社には、ふるさとへの想い、復興への想いを胸に入社を希望する東北出身の若者も多く集まってくる。紅梅夢ファームはまさにその受け皿として、彼らの活躍の場を用意しているのだ。「明るく、楽しく、真剣に」。同社の社是には、若い世代に存分に力を発揮してもらいたいという姿勢が表れている。

だが、彼ら彼女らが一人前になるまでには、ある程度の時間をかけて指導・教育する必要がある。特



同世代の従業員が多く、紺野さんも交じり自然に活気が生まれる



代表取締役の佐藤さんは紺野さんの活躍を頼もしく見守る

に、同社には非農家出身の従業員も多い。紺野さんは、その「指導責任者」として、試行錯誤を続けてきたという。

なかでも、従業員ごとの特性を見きわめ、その人に合わせた指導をするのが難しい、と紺野さんは打ち明ける。従業員には、「1を言えば、5くらいまではわかってくれる人」もいれば、「1から10まで言語化して初めて、指示を的確に理解してくれる人」もいる。例えば、紺野さんが「田んぼの水、見てきて」と指示したとき、本当に水を眺めて帰ってきた従業員がいた。紺野さんにとっては、その一言に「水

の量を調整し、生育状況などもチェックしてくる」という意味を込めたつもりだったが、そういったことが当たり前になると思っていけない、と認識を新たにしていたという。それらを少しずつ擦り合わせ、積み重ねていくことで、彼らも習熟していき、紺野さん自身も指導のコツをつかめてきた。

最近では、従業員がそれぞれ成長し、今までより多くのことを任せられるようになってきたことが何よりうれしいという。自分の頭で考え、経験をもとに、新たなアイデアを出してくれることも増えてきた。紺野さんが従業員一人ひとりと向き合い、さり気なく、時には正面からフォローしてきた成果のたまものだ。

スマート農業が突破口

また、8人の従業員での大規模耕作を実現する策として取り入れているのが、ICT（情報通信）技術を駆使したスマート農業だ。2019年3月、国や県、福島県相双復興機構などが進めるスマート農業の実証実験のモデル地区に当社が採択された。県内では特に津波被害を受けた浜通り地区において、活発に実証実験がおこなわれ

ている。同社は全体を統括する営農支援システムとして、K S A Sを採用。全国に先駆けて自動走行トラクターを導入したほか、直進キープ機能を搭載した田植え機や、米の食味や収穫量を測定するコンバイン、除草機や農薬を散布するドローンなどを取り入れたという。従業員一人に1台のタブレットを配り、作業記録を各自で入力してもらったことで、さまざまな営農データを蓄積している。

若手従業員が多いことは、スマート農業を推進していくことと非常に相性がいい。経験が浅くても機械が技術をカバーしてくれるほか、機械やタブレットの操作にもすぐ慣れる従業員が大半だからだ。

また、トラクターの稼働実績や、肥料や農薬、燃料の使用量なども記録されるので、作業の効率を高めるために必要な対策が一目でわかるようになったという。紺野さんは、これらのデータを基に、従業員一人ひとりの作業遂行能力を数値化し、作業スケジュールの見通しを立てる場面で活用している。さらに、「従業員一人当たりの耕作可能面積は10〜20畝」という目安ができたことで、将来の規模拡大の見通しも立てやすくなった。

30年には、現在の約3倍、350畝の規模を耕作「しないといけない」、と紺野さんは決意を口にす。この場所で営農を続ける農業者の数が限られている一方で、圃場整備は着々と進められ、耕作可能な農地に戻るところはこれからも増えていくからだ。そのために必要なことは何か。紺野さんは「目の前のことを一つずつこなしていくしかない」と言う。「ただ手と頭を動かしていくだけ。その過程でも気を抜かずに、生産する量が増えても品質が保たれるよう努力する。そうやって信用力と実績が積み重ねられて、『紅梅夢ファームに預けてよかった』と思ってくれる人が増えていくはず。そして気付いたら、その規模が実現している、という感じなんだと思う」

田んぼいっぱいには黄金の稲穂が揺れる、ふるさと小高区の風景。これまでずっと小高の人たちが守ってきたこの風景を、これからも守り、繋げていきたい。佐藤さんの想いはこうやってしっかりと紺野さんに引き継がれた。そして今、紅梅夢ファームの若いメンバーとともに、深く根を張っている。

（編集部 大谷 香織／文
網野 文絵／撮影）